

# 加害者扱いされる農家

— 作る人と食べる人の不幸な分断

大江正章（コモンズ／PARC共同代表）

放射能汚染がなす術もなく続くなかで、唯一、光が見えてきたことがある。

それは、放射能による農産物の汚染が予想されたより大幅に少なかったことだ。

しかし、この事実は、ほとんど正確に知られていない。

それを実現したのは、有機農業を中心とする長年の土づくりの営みである。

福島の生産者の声に耳を傾け、耕し作る人と食べる人のあるべき関係を考察する。

## 悲痛なメール

昨年の暮れも押し迫った一二月三〇日、

福島県有機農業ネットワークから、有機

農業者・減農薬農業者の米の支援を求め

る要請が、メールで流れてきた。それは、

長年にわたって土をつくり、草と闘って、

安全で安心できる米を作ってきた農業者

たちの魂の叫びと言っても過言ではない。

「(前略)年の瀬のこのときに、伊達市(

霊山町)のイチゴ農家、二本松市(東和町)

のりんご農家が自ら命を絶ちました。も

うこれ以上農民から犠牲者を出さないで

ください。福島県の米は農協の倉庫に業

者の倉庫にそして農家の納屋に生き場を

なくして年を越す状況にあります。

とくに消費者との産直で取り組んでき

た有機米、減農薬米の生産者の『これでは年を越せない』との悲痛な声に耳をかたむけてください。

すでに報道されているように、検査の

結果一〇〇ペクレル以下は九五%(不検

出は八五%)であり、基準値を超えたの

は〇・三%です。もちろん検査し、不検

出の米のみの支援をお願いするものです。

(中略)セシウムの米への移行が極力少

ないことが検証され、来年の米づくりに

光りが見えてきているこのときに、この

希望の芽に心を寄せて下さい」

## 米もリンゴも売れない

米に限らず、福島の農産物は売れない。

地域ぐるみで有機農業に取り組んでいる

旧東和町のリーダーのひとり・菅野正寿すげのせいじは、こう語る。

「うちの米や餅は例年のマイナス一〇%ぐらいだけど、東和全体ではリンゴ・サクランボ・畜産・ナメコなどが厳しい。個人客は、すぐには戻ってこないでしょう」

都市と多くのネットワークをもっている菅野ですらこうしたのだから、一般農家の深刻ぶりは推して知るべしだ。しかも、農協依存ではなく、自らの努力で産直や直売のルートを広げてきた農家ほど影響を受けている。同じ旧東和町のリンゴ農家・斉藤政廣(羽山果樹組合組合長)に聞いてみた。

斉藤は三・二haと大規模にリンゴを栽培し、庭先販売・宅配便・スーパーへの

おおえ・ただあき●1957年生まれ。ジャーナリスト、出版社「コモンズ」代表、PARC共同代表。主著に『農業という仕事—食と環境を守る』(岩波ジュニア新書)、『地域のか—食・農・まちづくり』(岩波新書)など。



上：有機農業に取り組んでいる旧東和町のリーダーのひとり、菅野正寿氏  
下：放射性物質の移行が少なくなるように様々な工夫をしながら福島の農家は生産を続ける（どちらの写真も菅野正寿氏提供）

「子どもが生まれるし、新鮮な野菜を食べさせたいと思いました。こっちへ来て新米を食べたとき本当に感激して、それから農業の虜になりましたね」  
義父は椎茸を栽培していたが、三留はきくらげに取り組んだ。会津では郷土料理のこづゆに欠かせないし、香典返しに使われるほどポピュラーなものだ。スーパー、生協、土産物屋などへ販路を広げてきたなかで、原発事故が起きた。  
「農協出荷の人に聞いたら、去年の秋の価格は通常の半分。規格外品は値がつかなかったそう

「このような膨大な在庫を抱えるとなると、作らないで放棄してしまうかということになります。実に喜ばしいことですね。万歳。毒撒きを止めさせるには買わないのが一番という消費者としての信念の大事さを感じるところです」  
福島県は二〇一二年二月三日、県内で米を作っている二万三三四七戸を対象に行った、昨年産米の放射性物質（セシウム）緊急調査の結果を発表した。それによると、①六四・二％は不検出、②新基準値の一〇〇ベクレル（1kgあたり。以下同じ）を超えたのが二市町村の五四

直接販売の三つが経営の柱だ。畑は福島第一原発から約四〇km。リンゴから検出された放射性セシウムは、1kgあたり最大二四ベクレルである（国が四月から適用予定の新基準は一〇〇ベクレル）。  
「こんなにひどいとは思わなかったです。とくに、去年の一月に入って福島市の米から1kgあたり五〇〇ベクレル以上のセシウムが検出されて以来、注文がぱったりなくなりました。いつもは一月に東京方面からの注文が増えるけど、去年はFAXも郵便もゼロ。一二月になっても状況は変わりませんでした」  
地元スーパーが他の産地からの仕入れを止めて買ってくれたが、全体の売り上げは例年の五五％にとどまった。  
「今年の秋も状況は変わらないでしょう。それでも、リンゴの木の除染を行っています」

高圧洗浄機で木の皮をはいでいくと、放射能は半分近くが除去されるという。防護マスク、眼鏡、合羽、手袋、長靴と重装備とはいえ、作業中の放射能汚染が気がかりだ。だが、山からの水を使う田んぼの汚染米を大きく報道するマスコミも、それを気にする消費者も、こうした農業者の被ばくには無関心である。

## 100km以上 離れているのに…

福島県は東西に広い。新潟県境に近い西会津町は福島第一原発から約一三〇km離れている。東京駅からの距離でいえば、沼津や甲府とはほぼ同じだ。三留弘法は、ここで菌床きくらげを生産・販売している。東京都足立区出身で、飲食業を経て四年前に妻の故郷へ移ってきた。

です。ぼくも東京に出していたところからは、すべてキャンセルされました」  
三留のきくらげは、民間機関での検査で放射性セシウムは不検出だった。しかし、だからと言って売れるわけではない。六月には東京の販路を広げようとスーパーやラーメンのチェーン店などへ営業に出向いたが、結果はさんざんだった。福島県というだけで話を聞いてもらえない。「『がんばろう福島』というキャンペーンがあったけど、全然違うと思いました。都会の人は冷たかったです」

## 米への移行は 想定より小さかった

福島で米や野菜を作る農業者は加害者であるという人が、かなりいる。以下は、福島の米が売れないことを訴えた生産者に対する、あるブログの引用だ。キーワードをたたきながら、怒りがこみあげてくる。

五戸で、二・三%、③暫定規制値の五〇〇ベクレルを超えたのは三市（福島市、小国村、波川村など九旧市町村）の三八戸、全体の〇・二%であった。

稲については、昨年春の段階で土壌から稲（玄米）への放射性物質の移行係数が〇・一とされ、土壌中の放射性セシウムが五〇〇〇ベクレル以上の田んぼでは作付けが禁止された。当時、大半の人びとが作付け禁止は妥当であると考えたであろう。（五〇〇〇ベクレルという基準が緩すぎるという批判も多かった）

ところが、市長が全市で稲の作付けを禁止した南相馬市で（稲だけを禁止するというこの指示自体、どう考えてもおかしい）、八四歳の老農が自らの信念で稲を作付けた。その田んぼは、四月の放射能検査では八七七ベクレル。相当に高い数値である。だが、一〇月になって収穫した玄米は九七ベクレル、精米は五四ベクレルであった。玄米への移行係数は〇・〇一一で、国の規定の九分の一に抑え込まれたのである。

### 放射能に勝つ土の力

これは、彼が四〇年にわたって、土をつくってきたからにはかならない。牧草や畦畔の草をおもな餌として牛を飼い、その糞を主体に米ぬかを加えた堆肥を投入してきた結果としての土の力が、放射能に勝った。まさに、地域資源循環型有機農業の成果と言ってよい。

同様な事実は、前述の東和地区でも見られる。野中昌法（新潟大学）の調査で

は、たとえば土壌中の放射性セシウムが四六〇〇ベクレルだった田んぼでも、収穫された玄米からは検出されていない。野中によれば、それは稲ワラの土への鋤き込みやカリ肥料の投入など田んぼへの手のかけ方の結果であるという。

野菜については、「季節の野菜」すべてが暫定規制値を下回っていると福島県がホームページで明らかにしている（二〇一二年二月三日現在）。ただし、こちらは数値は掲載されていない。また、知事の顔写真が載って「本県の農林水産物を応援して下さるようお願いします」と書かれているのは明らかに逆効果で、決して信頼感を得られないだろう。

そこで、農業者たちの自主測定と民間測定機関の検査結果を紹介しよう。前者は東和の生産者たちが作った六五〇点の野菜を昨年七月〜十二月に自ら調べたもので、九五%が一〇〇ベクレル以下であった。（だから安全と主張しているわけではない。なお、数値には自然界に存在するカリウム40も含む）後者は福島県内に昨年誕生した市民放射能測定所のもので、ほとんどが県内農産物である。サンプル数は多くないが、傾向はつかめる。（表）。

もちろん、これらの数値をどう評価するかは人によって異なる。限りなくゼロに近い値を求めるのであれば、二・三%も新基準値を超えていたり、最大値が三九ベクレルだったりするのは、許せないかもしれない。しかし、ある程度の農業者とのつきあいや農への思いがあれば、一年間でよくここまで減らしてきたと判断するのではないだろうか。政府や専門

### 福島県産野菜から検出された放射性セシウムの値（ベクレル/kg）

種類	サンプル数	最小値	平均値	最大値
ジャガイモ	40	0	7	39
大根	18	0	4	13
白菜	15	0	4	12
玉ねぎ	13	0	4	10
リンゴ	28	9	30	60

（注）2011年12月4日時点。

（出所）市民放射能測定所のデータより作成。

家、多くの消費者が想定したよりもはるかに少ない農産物の汚染で済んでいるのは、生産者の丁寧な土作りや、通常より深く耕すなどの地道な農作業による成果なのである。

こうした事実は驚くほど知られていない。だから、「福島のみや野菜は危険だ」と思ってしまう。反原発の気持ちが高い人ほど、そう考える。しかも、マスメディアは「五〇〇ベクレルを超える米が出た」となれば、現場に殺到し、大きく報道する。日常的な農業者の努力は報道しない。そして、消費者は生産者であることを「汚染を広げる加害者」として認識する。斉藤はこう語っていた。

「私たち福島県の農業者は原発事故の被害者です。被害者をいじめないでほしい。お金をかけて記者がたくさんやってくるけど、そのお金を使って放射能の問題を追及してほしい」

なお、いうまでもないが、放射能の影響はわからないことが多いのだから、決して安易に安全宣言などできない。米に関して言えば、山からの水を利用して田んぼなど放射能濃度が高いところはほぼ特定されている。それゆえ、そうした地域の詳細な（たとえば一〇〇mメッシュの）空間放射線量測定マップ・土壌汚染マップが作成されなければならない。その資金を出すのは、当然、国や東京電力である。

## 生産者と消費者の 分断を超えるために

福島のみならず東日本の生産者も、「顔の見える提携関係」のもとでその米や野菜を食べてきた人たちも、スーパーや生協で買う消費者も、すべて原発事故の被害者である。にもかかわらず、作る人と食べる人の間には分断と対立の構造が生み出されてしまった。しかも、安全性に敏感で、環境への意識が高い人ほど、東日本の生産者との関係を解消する傾向が高い。去年夏に行われた日本有機農業研究会の四〇周年記念シンポジウムで、二本松市有機農業研究会代表の大内信一は静かにこう語った。

「提携に熱心だった人ほど、年配の方を含めて、さっさと、足早く離れました。

提携だけでやっていたら、今日ばかりはこへ元気で来られませんでした」

これに対して、熱心に販売してくれる一般市場もあり、地元スーパーの有機コーナーも健闘しているそう。筆者の田んぼがある八郷（茨城県、福島第一原発から約一五〇km）でも、提携型の生産者は平均して三割の消費者からキャンセルされている。

かつて提携と言えば、生産者と消費者の親密な関係が特徴で、子どもを連れて（夫はめつたに行かなかつただろうが）援農で年に数回田畑を訪れたり、春先には作付会議を行ったりしていた。生産者は身近な存在で、食卓では個人名が話題にのぼったと聞く。

だが、一九九〇年代以降、消費者が田畑を訪れるケースは減った。大半は、せいぜい年に一回の収穫祭である。とくに新規就農の若い生産者の場合、農作業が忙しいという事情も理解はできるものの、両者の関係性が薄くなっている傾向が強い。そして、消費者と土との関係はほぼ切れていたのではないだろうか。身土不二ではなく、食農乖離だったのではないだろうか。

一方、家庭菜園や市民農園で自分が食べる野菜の一部を作る人たちは、比較的日常的に土と向き合っている。提携の消費者より土との親密度は高い。彼らの多くは悩みながら、野菜や米を作り、測定し、食べた。少なくとも、農作業をすぐし、止めようとはしなかった。それは、多少なりとも耕すことの意味や楽しさが、体をとおしてわかつていたからではない

だろうか。現在の不幸な分断を乗り越えるためには、消費者が田畑に出かけ、農の現状を知り、生産者の話を聞き、自らささやかな農の体験をすることから始めるしかない。

原子力発電所は、工業優先の高度経済成長社会のシンボルであった。だから、脱原発を目指すのであれば、必然的に経済成長という発想自体を問い直さなければならぬ。脱成長とは、第一次産業を重視した社会へ踏み出すということである。そして、持続可能な社会と農業を目指すのであれば、農薬と化学肥料に依存しない、資材低投入・自然共生の有機農業を中心とした持続型農業に切り替えるしかない。また、それは生産者と消費者が分断されず、互いに理解し、支えあう関係性のもとで行われなければならない。それが、フクシマから世界へ発するメッセージであり、日本人の責任である。

なお、本稿で取り上げた地域は空間放射線量が昨年夏の段階でおおむね毎時一mSv以下であり、農業を継続しながら放射線の影響を軽減できると考えられる。放射能汚染度がより高い地域では、移住しての営農継続を断念せざるをえない場合もある。それに伴う経費は、精神的な補償部分も含めて、国や東京電力が負担すべきである。同時に、土と農地と地域の間関係と風景に強い愛着をもつ農業者が、たとえ汚染度が高い地域であってもそこにどまり、自給的農業を行う権利は、認められなければならない。昨年の国際有機農業映画祭のテーマは、「それでも種を播こう」であった。